

記憶の政治学——米国の児童書が描くキング牧師——

黒崎 真

はじめに

アメリカ合衆国（以下、アメリカ）において、毎年1月の第三月曜日はマーティン・ルーサー・キング・ジュニア連邦祝日（以下、キング祝日）にあたる。この日あるいはこの日が近づくと、大統領、連邦議員、州知事などが祝賀スピーチを行い、全米各地では教育機関、教会、諸団体、各コミュニティが中心となって、祝賀パレード、地域への奉仕活動、講演会など様々な記念行事を催す。新聞、テレビ、インターネットもキング関連の記事や番組を扱う。キング祝日は、記念行事への参加やメディアの視聴などを通して、人々がキングについての記憶を形成し共有する機会を提供する日であると捉えることができる。

本稿は、記憶の形成に関わる多様な社会的、文化的媒体の中でも、キングについて書かれた米国の児童書を取り上げ、次の問題群を考察したい。すなわち、児童書はキングをどのように記憶しているか。キングについて書かれた児童書と国家が記憶するキングとの関係は何か。両者の関係が今日のアメリカ社会に持つ政治的、社会的意味とは何か。

ここで、本稿で児童書を取り上げる意義を述べておこう。1983年に連邦議会でキング祝日法案が可決されるに至る過程において、国家が記憶するキング——これを便宜上「公的記憶（public memory）」¹と呼ぶとする——が

¹ “public memory”の訳語に「公共の記憶」もあるが、本稿では「公的記憶」を当てる。訳語については、以下を参照。ジョン・ボドナー著、野村達朗他訳『鎮魂と祝祭のアメリカ：歴史の記憶と愛国主義』（青木書店、1997年）；阿部安成他編『記憶のかたち：コメモレイションの文化史』（柏書房、1999年）

いかに脱政治化されたかについては、すでに複数の研究がある。² これらの研究は、キングについての公的記憶の歴史的、社会的、政治的構築性を明らかにし、それがアメリカ社会に持つ諸問題を追及している点で、どれも極めて重要である。しかし、これらの研究は、主として政治的エリート、かつての公民権活動家、学者や知識人など、いわば大人の記憶のあり方を対象としてきた。したがって、キングについての公的記憶とアメリカ社会との関係を探る領域はまだあり、その一つが児童の記憶のあり方だと考えられるのである。家庭や学校は、児童が過去についての記憶を形成し共有する場を提供する。とすれば、児童が親や教師を媒介にキングについて書かれた児童書を読むという行為は、キングについての公的記憶とどのように結びついているのか。このような問いは、コメモレイションの研究者ゼルバヴェルによる、児童期に作られる記憶の持続性に関する以下の指摘に妥当性を認めるとき、さらに重要性を増すといえる。

保育園、幼稚園、そして第一学年の子供は、主要な歴史上の人物や出来事を、物語、詩、学校での劇、歌から学ぶ。こうしたジャンルは、しばしば事実と虚構、歴史と伝説を混ぜ合わせるが、その理由はこの色彩に富んだ混合によって、小さな子供には作品がより魅力的になると考え

² 以下の研究がある。Drew D. Hansen, *The Dream: Martin Luther King, Jr., and the Speech that Inspired a Nation* (New York: HarperCollins Publishers Inc., 2003), 207-29; Gary Dynes, *Making Villains, Making Heroes: Joseph R. McCarthy, Martin Luther King, Jr. and the Politics of American Memory* (New York: Garland Publishing Inc., 1997), 119-54; Michael Eric Dyson, *I May Not Get There With You: The True Martin Luther King, Jr.* (New York: The Free Press, 2000), 282-306; 遠藤泰生「公共文化とアメリカの自画像—自国史像の書き換えによる一九八〇年代、九〇年代の歴史思潮—」(アメリカ学会編『原典アメリカ史第九巻: 唯一の超大国』岩波書店、2006年)、324-9頁; 大類久恵「公的歴史としての『M・L・キング』—キング祝日制定過程および記念祝賀で描かれたキング像—」(『史境』第44号、2002年)、74-93頁; 黒崎真「米国におけるキング牧師連邦祝日制定と非暴力という遺産」(『神田外語大学紀要』第21号、2009年)、477-99頁。

られているからである。こうした顕彰行為（commemorations）は、過去に対する考えや認識の初期形成の一助となり、それらは後年になって史実に向き合ったとしても執拗に生き続ける場合がある。³

本稿は、キングについて書かれた児童書を考察対象とするが、これと関連し一点触れておきたい。それは、児童書とはそもそも児童の発達段階を考慮して作られていることである。本稿で扱う児童書（対象年齢4－8歳と9－12歳）も、特に対象年齢4歳から8歳のものには、この種の但し書きがある場合が多い。すなわち、児童書の目的は、児童に読書の楽しさを知ってもらうこと、児童が段階的に読書の難易度をあげ、語彙を増やしていけることなどである。したがって、たとえば発達心理学の領域からは、本稿で取り上げる児童書に対し、本稿とは全く異なる考察を行うであろうことは想像に難くない。本稿はあくまで、キングについての公的記憶との関連において児童書に関心を寄せる、歴史学の領域からの考察であると断っておく。

本稿の考察手順は次のようになる。まず、キングについての公的記憶とはどのようなものかを整理する。次に、キングについて書かれた児童書を分析する枠組を設定し、児童書を分析する。最後に、分析結果に基づき児童書と公的記憶との関係、および両者の関係が今日のアメリカ社会に持つ政治的、社会的意味について考察点を述べる。

1. 公的記憶におけるキング

キング祝日では、キングをどう記憶することが適切なのか。このことについて、1986年の第一回祝日以来、アメリカ社会に緊張関係が認められる。すなわち、国家が記憶するキング（＝公的記憶）に対し、もう一方のキング

³ Yael Zerubavel, *Recovered Roots: Collective Memory and the Making of Israeli National Tradition* (Chicago: The University of Chicago Press, 1995), 6.

を忘却しないよう警鐘を鳴らす人々というパターンである。ここで、そのような人々が記憶するキングを「対抗記憶」と呼び、公的記憶が語るキングの物語を「グランド・ナラティブ (grand narrative)」⁴、対抗記憶が語るキングの物語を「カウンター・ナラティブ (counter narrative)」と呼ぶとする。⁴ 以下、まず両ナラティブの内容を確認し、次に公的記憶の背後にある政治性を対抗記憶との関係において検討することで、キングについての公的記憶がどのようなものか整理したい。

まず、グランド・ナラティブが語るキングは、公的生涯前半のキング (1955 – 1965 年夏) である。キングは、アラバマ州モンゴメリーでのバスボイコット運動 (1955 – 56 年) を出発点に、南部法的人種隔離制度に対しキリスト教の愛の教えとガンジーの非暴力を用いて抗議した。1963 年 8 月 28 日のワシントン行進では、「私には夢がある」演説 (以下、「夢」演説) で人種融和の「夢」を雄弁に語って人々を動かし、愛と非暴力への献身ゆえに 1964 年にはノーベル平和賞を受賞した。その後、キングは 1968 年の暗殺を迎えるが、彼の活動は 1964 年公民権法と 65 年投票権法を成立させ、アメリカは永久に変わった。人種間の法的平等に生涯をかけたキングは、アメリカの英雄である。⁵

これに対し、カウンター・ナラティブが語るキングは、晩年キング (1965 年夏 – 1968 年 4 月) である。晩年キングが問題にしたのは、法的平等では解消されない根深い人種差別に対する白人の無理解、アメリカ資本主義と人種差別が結びついて生じる多数の黒人の貧困の固定化、豊かな国アメリカに

⁴ 本稿では、“countermemory”の訳語に「対抗記憶」を当てた。“counter narrative”の他に“alternative narrative”という表現もあるが、本稿では前者を使用する。“grand narrative”の他に“master narrative”という表現もあるが、“master”が持つジェンダー化、人種化された語感を避けるために、本稿では前者を使用する。この使用法については、以下を参照。Kathryn L. Nasstrom, “Between Memory and History: Autobiographies of the Civil Rights Movement and the Writing of Civil Rights History,” *The Journal of Southern History*, 74 no.2 (2008), 329.

白人も含め 4000 万人の貧困者がいる現実、神の代行者のごとくベトナムに干渉するアメリカの傲慢な軍事依存体質、そして、ベトナム戦争拡大が国内の貧困対策資金を削り取っているという事実であった。⁶ 以上の現状認識から、キングは連邦政府との対決を決意し、1967 年 4 月に正式にベトナム反戦を表明し、さらに、1968 年夏の「貧者の行進」を計画した。この計画は、経済的正義すなわち富の再配分による貧困の根絶を焦点に据え、連邦政府に対し仕事と一定の年収を全ての人に保証するよう迫るものだった。晩年キングの夢は、黒人の主流社会への統合ではなく、逆に主流社会の価値観を物志向から人間志向へ変革し、国家体制をより社会福祉重視に変革することにあった。⁷ しかし、1968 年 4 月の暗殺により、晩年キングの夢は成就され

⁵ たとえば、1983 年 11 月 2 日、キング祝日法案署名にあたり、レーガン大統領はこう演説した。彼は、まずキングの幼少期の法的人種差別体験、1955 年のモンゴメリー・バスボイコット運動に触れ、次に「バスボイコット後の数年間、キング牧師は法的平等を生涯の仕事としました」と述べ、非暴力の教えの堅持、1964 年のノーベル平和賞受賞、ワシントン行進での「夢」演説に触れる。次に、言及は 1968 年の暗殺に飛ぶ。キング牧師は暗殺されたが、彼の活動は 1964 年公民権法と 65 年投票権法に結実し、アメリカは永久に変わったと述べる。ただし、今日も偏屈な信念・行為の跡が見られるため、キング祝日に際してはキング牧師の隣人愛の教えを想起しようと締めくくる。以上から、レーガンの演説内容の特徴として、第一にキングの提起した課題を法的平等と位置づける、第二に晩年キングへの言及が無い、第三に今日残る問題を個人の偏屈な信念・行為の残存とし、社会・経済における構造的差別の問題、アメリカの軍事依存体質の問題への言及は無い点があげられる。The American Presidency Project, “Ronald Reagan, Remarks on Signing the Bill Making the Birthday of Martin Luther King, Jr., a National Holiday, November 2, 1983.” [http://www.presidency.ucsb.edu/ws/print.php?pid=40708] (2008/08/25)

⁶ たとえば、以下を参照。Martin Luther King, Jr., *Where Do We Go from Here: Chaos or Community?* (New York: Harper & Row Publishers, 1967), 1-22, 133; 猿谷要訳『黒人の進む道』([1968 年]サイマル出版会、1981)、2-23、142 頁。

⁷ Ibid., 133, 164-5; 同書、142、173 頁。ただし、このことはキングが公的生涯前半において、アメリカの人種差別の根深さ、貧困、軍事依存体質を認識していなかったということではない。むしろ、これらの問題に対する認識が晩年にはより洗練されたという方が正確である。その意味では、キングの生をそもそも公的生涯前半と晩年とに二分する思考法自体の妥当性も問われる必要があることを指摘しておく。これと関連する研究論文を一つ挙げれば、以下。この論文は、社会福祉重視を志向するキングの社会思想の根は、家庭環境（黒人教会の伝統）や大学院生時代にまでたどれるとする研究である。Douglas Sturm, “Martin Luther King, Jr., As Democratic Socialist,” *The Journal of Religious Ethics*, 18 no2. (Fall 1990), 79-105.

ざる課題として残された。

次に、公的記憶の背後にある政治性の問題を検討しておきたい。ただし、その議論は多岐にわたるため、ここでは三点⁸に留める。

第一は、公的記憶は国民全体が共有可能な記憶となるために、政治性の強い部分は後退させられ、結果として脱政治化されたものになる点である。南部法的人種隔離制度の不公平さ、および1964年公民権法と65年投票権法の意義を否定できる者はまずいない。したがって、法的平等を追求したキングという記憶は、国民全体が共有可能である。加えて、法的平等は両立法措置で達成された過去の事実であり、今日的政治性も持たない（＝脱政治化）。他方、晩年キングの未完の夢は、国民的合意の難しい、特に主流社会の反発を確実に招く課題で構成されている。言い換えれば、対抗記憶が持つ今日の政治性は極めて強力であり、それゆえ公的記憶はこれを後退させようとするのである。

第二は、公的記憶の脱政治化は、それ自体が権力者側の覇権維持という極めて政治的な意図により起こる点である。公的記憶は、法的平等を追求したキングと、両立法措置で南部人種隔離制度が崩壊した部分に焦点をあてる。これにより、キング祝日は、現在のアメリカが60年代の課題を克服し、より進歩した国家であることを確認する行事となる。反対に、対抗記憶のように晩年キングに焦点を当てた場合、キング祝日は、現在のアメリカが本質的な部分において60年代の課題を克服しておらず、その延長にあることを確認する行事となる。それは、キング祝日を国家の怠慢を批判する行事に変容させる危険性すらある。それゆえ、公的記憶は対抗記憶を後退させようとするのである。

⁸ 以下を参照。ボドナー『鎮魂と祝祭のアメリカ』；阿部『記憶のかたち』、8-9頁；Michael Kammen, *Mystic Chords of Memory: The Transformation of Tradition in American Culture* ([1991] New York: Vintage Books, 1993)

第三は、とはいえ公的記憶は対抗記憶を完全には拒絶せず、むしろ一定程度自らに取り込むことを許容することにより、結果的にその地位を維持し続けるという点である。1986年の第一回祝日以来、雑誌や新聞などを通じて、学者や知識人や活動家らが対抗記憶を忘却しないよう警鐘を鳴らし続けてきた。たとえば、第一回祝日に際し、デイビッド・ガロウは『フォーカス』誌において、「アメリカ人は、キングのそれ（1965年投票権法成立）以後の生とメッセージを想起する必要がある。そのメッセージは安心させてくれるものというより、挑戦的なものである」⁹と書いた。最近の例では、キングの「夢」演説40周年にあたる2003年8月27日付『USAトゥデイ』紙において、ドリュー・ハンセンは、「キングが貧困の無いアメリカを夢見たことを想起すべきだ」¹⁰と書いた。また、2004年1月19日付『ワシントン・ポスト』紙において、ジュリアン・ボンドは、キングの最後の五年間を人々は忘れていと述べ、「まるで彼は8月28日に『夢』演説をして、8月29日には亡くなっ

⁹ David Garrow, "The King We Should Remember," *Focus*, 14 no.1 (1986), 8. この中で、ガロウはキング祝日に際し想起すべき点として、晩年キングの生以外に、公民権運動を生み出した他の公民権活動家および何よりも無名の民衆の存在をあげる。本稿では、キング祝日に伴う後者の忘却の危険性について扱わないが、追求されるべき重要なテーマであると指摘しておく。なお、公民権運動の研究史をみると、おおよそキング祝日制定時期を境——キング祝日のみが要因ではないにせよ——に、公民権活動家エラ・ベイカーの「キングが運動を作ったというより、運動がキングを作った」という指摘を掘り下げ、研究の幅をさらに拡大し、公民権運動をより複雑に捉える努力が続いている。たとえば、公民権運動研究には大きく三つの波があり、第一波は全国的運動に（1970年代）、第二波は草の根運動（1980年代）に、第三波は両者の相互関係にも焦点を当てる（1990年代以降）。さらに、1950、60年代公民権運動を「短期の公民権運動」と捉え、それを1930年代からの「長期の公民権運動」の中に位置づける研究もある。詳細は、以下を参照。Steven F. Lawson, "Freedom Then Freedom Now: The Historiography of the Civil Rights Movement," *American Historical Review*, 96 no.2 (April 1991), 456-71; Charles W. Eagles, "Toward New Histories of the Civil Rights Era," *The Journal of Southern History*, 66 no.4 (November 2000), 815-48; Jacquelyn Dowd Hall, "The Long Civil Rights Movement and the Political Uses of the Past," *The Journal of American History*, 91 (March 2005), 1233-63.

¹⁰ Drew D. Hansen, "King's dreams for demise of racism, poverty continue today," *USA Today*, August 27, 2003.

たかのようにだ。・・・その男の半分しか祝わないのは恥ずべきことだ」¹¹ と嘆いた。

しかし、これらの警鐘により公的記憶が後退させられる事態は今のところ起きていない。その答えは、公的記憶がこの種の警鐘をむしろ許容し、公的記憶の一部に組み込んでしまうことで、結局は公的記憶の地位を維持し続けることができるという力学の中に見出せるのである。¹²

以上、グランド・ナラティブとカウンター・ナラティブを整理し、公的記憶の背後にある政治性を対抗記憶との関係において検討することで、キングについての公的記憶のあり方を確認した。次節では、キングについて書かれた児童書を分析する枠組み設定を行う。

2. キングについて書かれた児童書を分析する枠組

本稿は、キングについて書かれた児童書とキングについての公的記憶との結びつきを考察することを目的とする。したがって、まず児童書の内容、それらとグランド・ナラティブとの一致の有無を確認する作業が必要となる。これは、キングの生を語るグランド・ナラティブとカウンター・ナラティブから重要項目を取り出し、児童書がどれに言及しているかを調べることで確認できる。しかし、これだけでは、項目上の一致の有無という表面的な確認に留まってしまう。そこで、児童書のストーリー・ラインに着目し、それがグランド・ナラティブと一致するか否かまで確認できれば、児童書とグランド・ナラティブの構造上の一致の有無まで確認可能となる。とはいえ、ストーリー・ラインの何に着目するのが有効なのかは検討を要する。また、本稿の目的との関連でもう一つ検討が必要なことは、児童が児童書から得るキング

¹¹ Cited in Elain Rivera, "Not Just the Dream, but the Legacy: Events Honor King by Emphasizing Education, Service," *Washington Post*, January 19, 2004.

¹² もちろん、対抗記憶が勢いを増せば、両者の地位が逆転することもありうる。

の知識は、児童書自体の内容で決まるかである。これら検討事項に答えるにあたり、ジョン・ウィルズの研究論文¹³が示唆に富む考察を提示している。そこで、以下では同論文の主要な論点を取り出し、それらを参考に児童書の分析枠組みを設定する。

ウィルズの研究論文（2005年）は、学校教育が過去についての記憶の共有を生み出す制度的空間である点に着目する。そして、キング祝日にちなんだ教室での授業において、教師と生徒、生徒同士の質疑応答など共同作業を通じて、キングについての記憶の共有が生み出される過程を調査するものである。調査対象校は、ニューヨーク州ロチェスター郊外にある、ほぼ白人生徒の小学校第二学年二クラスであり、調査期間は1999年1月から9月であった。

授業に際し、二人の白人教師は主教材に *Yong Martin's Promise* (1993) を選んだ。この児童書の内容は、キングの幼少期の人種差別体験を描き、南部人種隔離制度を知った少年キングが将来これを変えようと決意し、結末では人種隔離制度撤廃法案を議会に認めさせるのに成功するというものである。ウィルズは、教室において「適切」とされるキングの記憶が選択的に作られていく過程を詳細に追っているが、主要な論点は次の三点にまとめられる。

第一に、記憶の共有プロセスは、教育課程で重視される「対立の解決(conflict resolution)」¹⁴ というカリキュラム枠内で進む。そのため、法的差別に直面したキングが、これをどう解決したかという部分が「適切」な記憶とされる。生徒の中には、南部白人による暴力の実態を質問する者もいたが、そのような部分は授業では「不適切」な記憶として忘却させられる。¹⁵

¹³ John S. Wills, "Some people even died: Martin Luther King, Jr, the civil rights movement and the politics of remembrance in elementary classrooms," *International Journal of Qualitative Studies in Education*, 18 no.1 (January-February 2005), 109-31.

¹⁴ "conflict resolution" の適訳がないため、とりあえず「対立の解決」とした。

¹⁵ Ibid., 124-125.

第二に、教師の教育理念も生徒の記憶形成に影響を持つ。二人の教師が生徒に理解させたいキングは、法的差別という問題を非暴力で解決したという部分であった。二人の教師は、世の中の不正は人々の協力で解決可能だという肯定的世界観を生徒に持たせたかったのである。そのため、二人の教師は、時間の許す限り生徒の多様な質問に丁寧に応答したが、否定的世界観につながりかねない南部白人による暴力の実態は、追求を避けようとした。¹⁶

第三に、キングがどのように問題を解決したかという部分を追求し、南部白人による暴力の実態の追求には沈黙するという教室での記憶のあり方は、アメリカ主流社会のキングの記憶のあり方を反映している。¹⁷

以上が、ウィルズの研究論文の主要な論点である。ここから児童書のストーリー・ラインを追う際の着眼点を二つ取り出せる。一つは、それが「対立の解決」を軸に展開しているかであり、もう一つは、それが肯定的世界観を描いているかである。

次に、児童が児童書から得るキングの知識は、児童書自体の内容で決まるかという問いを検討したい。ウィルズ自身は、生徒が児童書から得るキングの知識は、児童書自体の内容で決まるというより、これを題材とした教師と生徒との読書と議論を通じた共同作業の中で形成されると指摘する。¹⁸ これは正鵠を射た指摘である。しかし、この調査に限って言えば、ウィルズが明かにしたことは、むしろ教育カリキュラムの関心と教師の関心とが、主教材の児童書の内容に一致し、児童書の内容とかけ離れたキングの記憶は形成されなかったということではないか。この問いは、状況により異なる結果が出る断定困難な問いであるだろう。とはいえ、ウィルズの調査結果自体に照らすなら、一般的傾向としては、児童が児童書から得る知識は、親や教師との

¹⁶ Ibid., 125-126.

¹⁷ Ibid., 126.

¹⁸ Ibid., 114-115.

共同作業を通した場合にも、児童書の内容にそれなりに近いものになるといえそうである。

以上から、児童書の分析枠組として次の三点を設ける。第一は、キングの生に関する諸項目のうち、児童書はどれに言及しているか。第二は、児童書のストーリー・ラインは「対立の解決」を軸にしているか。第三は、児童書のストーリー・ラインは肯定的世界観を描いているか。以上である。

3. 児童書が記憶するキング

本節では、キングについて書かれた児童書を分析する。それらは多数あるが、本稿では主として 2007 年度中に書店アマゾンのインターネットを通じて入手した対象年齢 4 歳から 8 歳の児童書 10 冊と、対象年齢 9 歳から 12 歳の児童書 4 冊を分析対象とする。

(1) 対象年齢 4 歳から 8 歳の児童書が記憶するキング

対象年齢 4 歳から 8 歳の児童書の書名と出版年は以下である。¹⁹ これらは、長さがおおよそ 20 ページ後半から 30 ページ前半で、文章に比べ写真や絵の量が多い構成となっている。① *Martin Luther King Jr. Day* ([1987] 2004) ②

¹⁹ 詳細情報は以下（本文掲載順）。Linda Lowery, Hetty Mitchell, *Martin Luther King jr. Day* ([1987] Minneapolis, MN: Millbrook Press, 2004), 56p; Jean Marzoll, J. Brian Pinkney, *Happy Birthday, Martin Luther King* (New York: Scholastic, 1993), 32p; Faith Ringgold, *My Dream of Martin Luther King* (New York: Crown Publishers, Inc., 1995), 26p; June Behrens, Pauline Brower, Nancy Swan, *King! The Man & His Dream* (Newport Beach, CA: York House Publisher, 1996), 31p; Mir Tamin Ansary, *Martin Luther King Jr. Day* ([1996] Chicago, IL: Heinemann Library, 2006), 32p; Frances E. Ruffin, Stephen Marchesi, *Martin Luther King, Jr. and the March on Washington* (New York: Grosset & Dunlap, 2001), 48p; Denise Lewis Patric, Rodney S. Pate, *A Lesson for Martin Luther King, Jr.* (New York: Aladdin, 2003), 32p; Julie Murray, *Martin Luther King Jr. Day* (Edina, MI: ABDO Publishing Company, 2005), 24p; Alma Flor Ada, F. Isabel Campoy, *Celebrate Martin Luther King, Jr. Day with Mrs. Park's Class* (Miami, FL: Santillana USA Publishing Company, Inc., 2006), 31p; Trudi Strain Trueit, *Martin Luther King Jr. Day* (New York: Scholastic Inc., 2007), 31p.

Happy Birthday, Martin Luther King (1993) ③ *My Dream of Martin Luther King* (1995) ④ *King! The Man & His Dream* (1996) ⑤ *Martin Luther King Jr. Day* ([1996] 2006) ⑥ *Martin Luther King, Jr. and the March on Washington* (2001) ⑦ *A Lesson for Martin Luther King, Jr.* (2003) ⑧ *Martin Luther King Jr. Day* (2005) ⑨ *Celebrate Martin Luther King, Jr. Day with Mrs. Park's Class* (2006) ⑩ *Martin Luther King Jr. Day* (2007)

まず、キングの生涯を 18 項目に分け、10 冊の児童書がどの項目に言及しているか確認する。各項目の括弧内には、その項目に言及している児童書の冊数と児童書の番号が示される。結果は、以下となる。

＜キングの生涯前半＞

1. 誕生・幼少期の差別体験(8 冊①～⑤、⑦、⑨、⑩)
2. 大学生活・結婚(3 冊：①、②、⑩)
3. 南部法的人種隔離制度全般(8 冊：①～⑥、⑨、⑩)
4. モンゴメリー・バスボイコット運動(6 冊：①～⑤、⑨)
5. ガンジーと非暴力(7 冊：①、③～⑥、⑧、⑨)
6. 坐り込み運動(2 冊：⑤、⑥)
7. フリーダム・ライド(0 冊)
8. バーミンガム運動(2 冊：③、⑤)
9. ワシントン行進と「夢」演説(8 冊：①～⑥、⑧、⑩)
10. ノーベル平和賞受賞(3 冊：④、⑧、⑨)
11. 1964 年公民権法・1965 年投票権法(5 冊：④～⑥、⑨、⑩)
12. セルマ運動(0 冊)

＜晩年キング＞

13. シカゴ運動(0 冊)
14. ブラック・パワー運動(0 冊)
15. ベトナム反戦(0 冊)
16. 貧困問題・貧者の行進(0 冊)
17. 暗殺(6 冊：①～⑤、⑩)
18. キング祝日(5 冊：①、②、④、⑤、⑧)

10 冊の児童書は、「暗殺」以外はいずれも晩年キングには触れていない。ここで、キングの生涯前半のうち特に言及が多い項目を順に並べると、「誕生・幼少期の差別体験」、「南部法的人種隔離制度全般」、「モンゴメリー・バスボ

イコット運動」、「ガンジーと非暴力」、「ワシントン行進と『夢』演説」、「1964年公民権法・1965年投票権法」となり、グランド・ナラティブと一致する。逆にいえば、この並びはグランド・ナラティブが「問題発見—問題解決探求—問題解決」という「対立の解決」を軸にしていることを裏付ける。

次に、児童書のストーリー・ラインが「対立の解決」を軸にしているかをみると、10冊中8冊（①、③～⑥、⑧～⑩）はそれが明確にわかる。児童書により細部は多少異なるが、ストーリー・ラインは、まずキングの「問題発見」（幼少期の人種差別体験、ローザ・パークスの逮捕など）、次に「問題解決探求」（言葉の力の発見、ガンジーから非暴力を学ぶ、各地で演説や行進を行うなど）、最後に「問題解決」（バスの人種隔離撤廃、ランチカウンターの人種統合、1964年公民権法・1965年投票権法の成立など）となっている。残る2冊は、そこまで明確ではない。しかし、たとえば②の場合、「彼は問題を解決するための平和的な方法があると言いました（He said that there were peaceful ways to solve problems）」と強調し、⑦の場合、キングの幼少期の差別体験を描いたあと、キング少年に「ぼくがルールを変えられないかな（Can't I change the rules?）」と言わせて話が終わる。したがって、②も⑦も、基本的には「対立の解決」を軸にしているといえる。²⁰

最後に、児童書のストーリー・ラインが肯定的世界観を描いているかをみると、10冊ともそうっており、南部白人による暴力の実態の描写はほとんどない。児童書はどれも、多数がキングを支持した点を強調する。いくつか拾うと、①は「多くのアメリカ人もこの夢を持っていました（Many Americans also had this dream）」と、②は「彼が話すと、皆が聞きました（When he spoke, people listened）」と、⑤は「何千もの人が彼に賛成しました（Thousands of people agreed with him）」と書く。他方、反対者の存在への言及がないわけ

²⁰ 対立の解決は肯定的な事柄である。つまり、ストーリー・ラインにおいて「対立の解決」の軸と肯定的世界観の描写とは、相互に関連しているといえる。

ではない。しかし、たいていは④にある「ですが、中には彼のように考えない人もいました (but some people did not think as he did)」のように和らげて表現される。⑧は「多くの人々はマーティン・ルーサー・キング・ジュニアが公民権について語ることを嫌がりました (Many people did not like what Martin Luther King, Jr. said about civil rights)」と書く。しかし、なぜ嫌がったか説明がないことは、この一文が重要ではないことを意味する。

(2) 対象年齢 9 歳から 12 歳の児童書が記憶するキング

ここでは、対象年齢 9 歳から 12 歳の児童書 4 冊を分析する。これらは、②を除き長さが 100 ページほどで、記述量が増し歴史叙述の側面が強くなり、絵や写真は少なくなる。題名と出版年は以下である。²¹ ① *Meet Martin Luther King, Jr.* ([1969] 1993) ② *Martin Luther King Jr. Day* (2001) ③ *Celebrate Martin Luther King, Jr., Day* (2006) ④ *Who Was Martin Luther King, Jr.?* (2008)

まず、先ほどと同様の手順で、4 冊の児童書がキングの生のどの項目に言及しているか確認する。結果は、以下となる。

<キングの生涯前半>

1. 誕生・幼少期の差別体験 (4 冊)
2. 大学生活・結婚 (4 冊)
3. 南部法的人種隔離制度全般 (4 冊)
4. モンゴメリー・バスボイコット運動 (4 冊)
5. ガンジーと非暴力 (4 冊)
6. 坐り込み運動 (4 冊)
7. フリーダム・ライド (3 冊: ①、②、④)
8. バーミンガム運動 (4 冊)
9. ワシントン行進と「夢」演説 (4 冊)
10. ノーベル平和賞受賞 (4 冊)
11. 1964 年公民権法・65 年投票権法 (4 冊)

²¹ 詳細情報は以下 (本文掲載順)。James T. De Kay, *Meet Martin Luther King, Jr.* ([1969] New York: Landmark Books, 1993), 104p; Dana Meachen Rau, *Martin Luther King Jr. Day* (New York: Children's Press, 2001), 47p; Laura S. Jeffrey, *Celebrate Martin Luther King, Jr., Day* (Berkeley Heights, NJ: Enslow Publishers, Inc., 2006), 104p; Bonnie Bader, Elizabeth Wolf, *Who Was Martin Luther King, Jr.?* (New York: Grosset & Dunlap, 2008), 100p.

冊) 12. セルマ運動 (3 冊: ①、③、④)

＜晩年キング＞

13. シカゴ運動 (2 冊: ①、④) 14. ブラック・パワー運動 (1 冊: ①) 15. ベトナム反戦 (0 冊) 16. 貧困問題・貧者の行進 (3 冊: ①、③、④) 17. 暗殺 (4 冊) 18. キング祝日 (3 冊: ②、③、④)

対象年齢 9 歳から 12 歳の児童書では、キングの生涯前半については 4 冊ともほぼ全ての項目に言及しており、数冊はさらに晩年キングについての言及も少しある。ただし、詳細にみると、晩年キングの記述が本全体に占める割合は極めて少ない。たとえば、キングの生涯前半と晩年キングに割かれる大よそのページ数は、①は 80 ページに対し 16 ページ、②は 24 ページに対し 2 ページ、③は 25 ページに対し 1 ページ²²、④は 80 ページに対し 10 ページである。したがって、これらの児童書の焦点もまた、キングの公的生涯前半に当てられているといえる。さらに、各児童書がキングの公的生涯前半の項目のうち最もページを割いているのは、「モンゴメリー・バスボイコット運動」(4 冊)、「バーミングハム運動」(1 冊: ④)、「ワシントン行進と『夢』演説」(2 冊: ②、③) となる。つまり、「モンゴメリー・バスボイコット運動」を出発点に「ワシントン行進と『夢』演説」に至るという流れは、グランド・ナラティブに一致することがわかる。

次に、児童書のストーリー・ラインが「対立の解決」を軸にしているかをみると、記述量が増し歴史叙述の側面が出るため、対象年齢 4 歳から 8 歳の児童書ほどの明確さはない。ただし、キングの公的生涯前半に限定すれば、記述は詳細になったとはいえ、基本的には「対立の解決」を軸にしていると

²² ③は、残り 50 ページ強をキング祝日制定過程と全米各地の祝日関連行事の記述に当てる。したがって、キングの生涯自体の記述は、本全体の 4 割程度になる。そのうち、晩年キングに割かれるのは、1 ページということになる。

みなすことができる。他方、貧困問題に取り組む最中に死を迎えるといった晩年キングの記述は、「対立の解決」に至らないため、この軸には入らない。ところが、これは次にみる肯定的世界観との関連で解決される仕組みになっている。

では最後に、児童書のストーリー・ラインが肯定的世界観を描いているかをみてみる。4冊の児童書は、記述量が増す分、1964年公民権法と65年投票権法までの道のりが簡単ではなかったことを伝えるが、公的生涯前半のキングの記述については、肯定的世界観を描いているといえる。問題は、わずかとはいえ晩年キングへの言及である。この部分は「対立の解決」に至らず、よって肯定的世界観の描写は難しい。ところが、4冊の児童書の締めくくり方に着目すると、①は1993年までにアメリカ社会には「キングが微笑むだろう諸変化」が起きていると強調し、②と③と④はキング祝日制定によりキングの夢が人々に受け継がれている——その夢が具体的に何かはぼかされている——とつなぐ。それにより、晩年キングの部分が中和され、4冊の児童書は、いずれも全体としては肯定的世界観を得られる構成となっている。さらに児童書を細かくみると、記述量が増したとはいえ、キングの公的生涯前半の記述では、南部白人による暴力の実態描写は少ない。また、①と③と④は、晩年キングの貧困問題に言及しているが、カウンター・ナラティブが語る貧困問題の原因——根深い人種差別、資本主義の構造的な格差創出、軍事依存体質——を問う記述はない。その意味で、対象年齢9歳から12歳の児童書の場合も、否定的世界観につながりかねない描写は極力抑えられているといえる。

おわりに

本稿では、米国の児童書がキングをどのように記憶しているか分析を行ってきた。まとめとして、キングについて書かれた児童書とキングについての

公的記憶の関係は何か、両者の関係が今日のアメリカ社会にもつ政治的、社会的意味とは何かについて、考察点を述べることにする。

まず、児童書の分析結果として、次のことが言える。対象年齢4歳から8歳の児童書は、キングの生涯についての言及項目、「対立の解決」と肯定的世界観を軸とするストーリー・ラインにおいて、グランド・ナラティブの構造と一致する。対象年齢9歳から12歳の児童書の場合、記述量は増すが、焦点は公的生涯前半のキングにある。これら児童書が対象年齢4歳から8歳の児童書と異なる点は、「しるし (token)」程度ではあれ晩年キングへの言及がある点である。しかし、この点はそれに続く結末で、キング暗殺後にアメリカ社会に生じた肯定的変化を記述し、キング祝日制定によるキングの夢の継承を肯定的に記述することで、その深刻さが中和、忘却される構造になっている。本稿で検討した公的記憶が持つ政治性、すなわち公的記憶は対抗記憶を一定程度許容することで結果的にその地位を維持し続けるという点に照らすと、晩年キングを「しるし」程度取り込みつつ結末で中和するという児童書の構造は、実に公的記憶の構造に一致するものであることがわかる。

では、児童書が記憶するキングと国家が記憶するキングとの一致は何を意味するのか。それは、キングについての公的記憶が世代から世代へと再生産される仕組みが、アメリカ社会に構造的に組み込まれているということである。もちろん、児童が児童書から得るキングの知識は、児童書自体の内容で決まるわけではなく、これを題材とした親や教師との読書と議論を通じた共同作業の中で形成される。しかし、その場合でも、本稿で取り上げたウィルズの調査結果に照らすと、児童書の内容とかけ離れた記憶が形成されると考えることは難しい。さらに、ゼルバヴェルが指摘する児童期に形成された記憶の一定程度の持続性を考慮すると、研究者および晩年キングの生に関心を示す一部の知識人や大学生や大学院生を除き、一般の人々の間では児童書と同種のキングについての記憶が持続し、それがキングについての公的記憶を

随時補強していく構造を見出すことができる。したがって、キングについての公的記憶は、今後もアメリカ社会において極めて強力なものとして存在し続け、これを矯正するための対抗記憶は、世論にはなかなか浸透しないことが予測される。

このことがアメリカ社会に持つ政治的、社会的な意味は、本稿では扱いきれない大きなテーマである。一点指摘すれば、キングについての公的記憶が、むしろアメリカ社会が抱える根深い人種差別、貧困、軍事依存体質に対する根本的な取り組みへの連邦政府と世論の関心を希薄化させ、弱体化させる流れに加担してしまう危険性である。その影響は、すでに多方面に見出せる。今や、キングの「夢」演説は、「カラー・ブラインドネス」を主張する保守派によって、「アファーマティブ・アクション (Affirmative Action)」に反対する根拠の一つとされるに至っている。²³ 黒人の貧困の固定化の原因は、社会・経済構造上の問題というより、個人の意欲や努力の欠如とされる傾向が続いている。2007 年度に貧困ライン未満で暮らす人は、総人口 3 億人の 12.5% に当たる 3730 万人おり²⁴、貧困は 60 年代と同様に深刻な問題であり続けている。晩年キングを忘却することで、ブッシュ・ジュニア政権は、キング祝日に際しキングの偉業を称えることと、先制攻撃ドクトリンを掲げて 2003 年 3 月にイラク戦争を遂行することとの間に、何の矛盾も見出すことはなかった。²⁵ こうした状況は、対抗記憶の活性化の必要性を再認識させるが、本稿で検討してきたように、対抗記憶の一部をも取り込んでしまう公

²³ 以下を参照。Hall, “The Long Civil Rights Movement and the Political Uses of the Past,” 1237-8; Michael K. Brown, Martin Carnoy, et. al., *Whitewashing Race: The Myth of a Color-Blind Society* (Berkeley, CA: University of California Press, 2003)

²⁴ U.S. Census Bureau, “Income, Poverty, and Health Insurance Coverage in the United States: 2007,” 12.

²⁵ George W. Bush, “Martin Luther King, Jr., Federal Holiday, 2003: A Proclamation by the President of the United States, January 17, 2003.” [<http://www.whitehouse.gov/news/releases/2003/01/print/20030117.html>](2008/08/24)

的記憶のしたたかさ、公的記憶の世代から世代への再生産のサイクルを踏まえると、その糸口を見出すのは難しい。

とはいえ、公的記憶も固定的ではない。2001年9・11同時多発テロ以降、毎年キング祝日には、全米各地でブッシュ・ジュニア政権に対する反戦集会やデモ行進が行われきた。²⁶ 世論調査機関ピュー・リサーチ・センターの2007年の調査では、回答者の73%が貧富の差の拡大を実感し、69%が貧困者に対する政府のセーフティネット強化を支持する。²⁷ そうした中で2009年1月に発足したオバマ政権は、アメリカ経済の再生と同時に、国民皆保険、国際協調主義を政策に掲げている。このような流れは、キングについての対抗記憶の活性化と公的記憶の再定義につながる可能性を全く秘めていないともいえない。その意味で、今後のキング祝日の行方を注視していきたい。

[付記]

本稿は、平成19年度佐野学園特別研究助成金（個人研究）による研究成果である。心より謝意を表したい。

²⁶ 関連記事を一つあげれば以下。“Memorials, Volunteerism, War Protests Mark King’s Birthday, January 19, 2004.” [<http://edition.cnn.com/2004/US/01/19/king.day.ap/index.html>](2008/09/29)

²⁶ Pew Research Center, “Trends in Political Values and Core Attitudes: 1987-2007,” March 22, 2007, 12.